

郷土や地域に着目した古典の指導

―「島津いろは歌」を例に―

宮内 征人

一 郷土や地域に着目した古典指導の先行研究

平成二十年版学習指導要領において、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、小学校の段階から古典の指導が導入された。小学校の段階から古典の指導が導入されたことにより、中学校の古典の授業のあり方も変わることとなった。本論においては、郷土に関わる古典を見つけ、その価値を再発見させるための郷土や地域に着目した古典指導について、「島津いろは歌」を例に論じるものである。

郷土や地域に着目した古典指導に関する近年の論考には、例えば、岩間正則^①の「中学校で地域の文化・伝統を活かす教材開発を考える」や米田猛・松田明大^②による「中学校国語科古典指導における「地域教材」の開発試論」、さらに井上昌典^③の「郷土にまつわる古典の教材化の試み」等がある。これらは、神奈川県、富山県、奈良県をそれぞれ題材として扱っている。

岩間は、単元「神奈川ゆかりの短歌を味わう」を設定し、「古事記」から現代短歌まで幅広く取り上げる。学習者にわかりやすくするために、振り仮名と簡単な解釈を付けたものを提示し、地図を活用して歌と場所との関連を確認させた。さらに、気に入った短歌を取り

上げ、詞書きも創作させている。この学習にはさまざまな工夫が見られる。振り仮名や口語訳をつけ、古典が苦手な学習者への理解の手助けとする。歌と地理との関係性から社会科との連携を図る合理的な学習といえよう。気に入った短歌を選ばせることや詞書きを書かせる活動は、言語活動の充実を図る上で有効であるといえる。

米田・松田は、越中で詠まれた「越中万葉」の中から大伴家持の和歌六首と家持が都で詠んだもの二首の計八首を取り上げ、越中の「雪の威厳と崇高な美しさ」を詠む家持の雪観をとらえさせている。

ここでの実践のねらいは、「都の雪歌」と「越中の雪歌」の違いに気づかせることにあつた。越中の雪の情景を想像させ、越中の雪に対する家持の思いを考えさせている。「自分の郷土に新たな発見をしている」様子や「郷土の風土に改めて関心を持つ感想」が学習者の反応から多く見られたことが述べられている。学習者が意欲的に和歌を鑑賞し、郷土の理解が深まったことをふまえ、地域教材の有効性や必要性を論じている。

井上は、奈良県葛城市の当麻寺にまつわる「中将姫説話」や同市に伝わる「孝女伊麻の伝承」を教材として活用した。「中将姫伝説」とは、「出家した中将姫の願により、観音の化女が蓮糸を用い一夜で曼荼羅を織ったとする仏教説話」である。「孝女伊麻の伝承」は、

「父親に対する姉弟の孝行談」で、「人々は姉弟の孝心を賞賛し、孝行の鑑とした」といわれる。「中将姫説話」では古典と民話との共通点や相違点を明らかにし、「孝女伊麻の伝承」においては伝承に關して複数の資料の比較読みをさせ、その根拠を考えさせている。

平成二十年版小学校学習指導要領の〔第一学年及び第二学年〕の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕ア(ア)には「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。」とある。小学校段階において、伝統的な言語文化に親しむ態度の育成を目指している。井上実践では、民話を取り上げている点が興味深い。グループ学習で民話との共通点、相違点を明らかにし、説話が現代まで受け継がれてきた理由を考えさせている。

三論考は、関東、北陸、関西の郷土に関わる古典を見つけ、その価値を再発見させる学習指導である。古典の世界に親しみ、伝統や文化に対する関心や理解が深められたことが成果として挙げられよう。いずれも伝統的な言語文化の授業づくりについて地域教材を開発した実践であるが、課題もあろう。平成二十年版中学校学習指導要領の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕のア「伝統的な言語文化に関する事項」には、次のような事項が示されている。

第二学年

(イ) 古典に表われたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

この事項について、米田・松田実践の「家持の雪観」には見られるものの、他には明確に示されていないように思われる。この点に着目した、教材開発と言語活動の工夫ができないか。地域教材を

活用することの意義は何か。鹿児島県における伝統的な言語文化の授業づくりについて、地域教材を開発した実践にはどのような手立てが有効か、などが本論における問題意識となっている。

二 「島津いろは歌」を活用することの意義

先述の論考では神奈川県、富山県、奈良県、それぞれの地域に関わる古典を扱っていた。鹿児島県においても、郷土に関わる古典がある。「島津いろは歌」である。取り上げる根拠は次のとおりである。

「島津いろは歌」は人としての道や人の上に立つものの心得を詠んでいる。家臣団の指導と教育のため、家臣団としての規律を理解しやすいように、和歌の形を採って覚えやすいようにしてあり、年少の者でも諳んじることができる。和歌に薩摩人としての誇りや理念をメッセージとして込めた古典である。戦国の世に作られたとはいえ、先人の教えを包含する和歌は現代に生きる私たちにとっても指針とすべきであり、学ぶ価値があるといえよう。

「島津いろは歌」は、島津家中興の祖といわれる島津忠良公が天文一四（一五四五）年頃に、合戦を通じて学んだことやそれまでの人生経験、そこから得た知識、知恵を歌に託して詠んだもので、いろはの順に「い」から「す」まで四十七首ある。「島津いろは歌」は人としての道や人の上に立つものの心得を詠んでいる。これはのちに薩摩藩の藩教育の基本となり、役人たちが登庁するとまず、三首を拝吟してから職務に取り掛かったという。生き方や考え方など普遍的な価値は時代を超え、現代とも共通する部分は多い。現代に

において、自分の生き方や考え方について自らを問い直す「島津いろは歌」の学習は郷土をよりよく知り、伝統的な言語文化に親しむ態度の育成から有効といえよう。

武久康高は、「児童生徒が郷土文学教材を学習する意義とは何か」のなかで、郷土教材学習の意義を、「自分やクラスメートの郷土への見方と比較することで作者の見方を相対化する」及び「郷土に対するものの見方を広げ、深める」の二点を挙げている。郷土教材を扱った学習は郷土と自己との関係性を見つめ直す契機となる。

そこで、論者は、地域教材「島津いろは歌」を活用することの意義として、次の要件を提示する。

I 学習者の興味・関心を喚起し、学習意欲を高めることができる。

II 実物に触れ、実体験に基づいた学習は実生活とも結びつき、確かで豊かな学びの力となる。

III 当時のものの見方や考え方、生き方について思いを巡らし、自分なりの考えをもつことができる。

IV 社会科など全ての教科において関連付けた学習が展開でき、多様な学習活動が期待できる。

V 郷土の伝統や文化に対する関心や理解を深め、郷土愛を育むことができる。

I は学習の基本となる、関心・意欲を示している。鹿児島市や鹿児島県の歴史的遺産について、関心をもち、その価値に気づくことが学ぶ意欲を高めることにつながるといえよう。II は実物（島津いろは歌）に触れ、実体験に基づいた学習は生活と結びつき、豊

かで確かな学びとなる。III は「島津いろは歌」の学習を通して、武久のいう、「郷土に対するものの見方を広げ、深める」ことができる。

郷土と自己との関係性を見つめ直す契機となろう。III は「I」での課題をふまえたものである。IV は「島津いろは歌」の学習を通して、作者や時代背景、後世に与えた影響などについて、社会科や総合的な学習の時間、道徳などとの合科的な学習が期待できる。歴史学習の好きな学習者が知的好奇心を示す学習が期待できよう。V は郷土の伝統や文化に関心を持つことによつて、郷土愛を育むことができる。以上の五つを要件として、検証を試みることにした。

三 「島津いろは歌」の指導計画

「島津いろは歌」について、事前に行った対象学級（一年一組）での調査では、次のような結果が表れた。

ア 前から知っていた。	0 名（0 %）
イ 聞いたことはあったが、よくは知らない。	13 名（41 %）
ウ 知らない、聞いたことがなかった。	19 名（59 %）

薩摩藩を島津氏が長らく治めていたことは知っていても、「島津いろは歌」について知らない学習者は約六割もいた。また、「島津いろは歌」という言葉を聞いたことはあっても、一体どんな内容なのか知らない学習者が約四割いた。

この結果をふまえ、郷土や地域に着目した古典指導として、郷土に関わる古典を見つけ、その価値を再発見させる授業を中学一年生において実践することとした。本実践のねらいは、島津忠良公の遺

訓が今も昔も変わらぬ普遍的な価値を持ち、現代に生きる人々の指針となりうることを理解させることにある。先人の残した歴史的遺産は現代においても十分に価値をもつものである。

教科書の古典の教材に郷土の古典作品を加え、言語活動の充実を図る学習指導計画を立てた。次は一年生に関する古典の指導計画である。上段は教材名と配当時間、下段には教材の主な目標を示した。郷土教材を通して鹿児島という風土について考え、精神性と自己との関係性を見つめ直し、郷土愛を育むことを目指した。教科書は三省堂版を使用した。

1年・10時間		教材名と配当時間	教材の主な目標
・「竹取物語」 (4)	・「矛盾」 (3)	・「島津いろは歌」(3)	・古典のリズムを味わいながら、古典の世界にふれる。 ・故事成語の由来を理解して、ものの見方や考え方を広げる。 ・仮名遣いに注意し和歌のリズムに読み慣れ、作者の思いを想像しながら古典和歌への関心をもつこと。

「島津いろは歌」の指導は三時間配当とし、次のような計画を立てた。〈第一時〉の「背景となる歴史的な状況、作者の当時の立場や置かれていた状況などを知る」については、配慮事項として、興味や関心をひくように、内容の理解を助ける程度にとどめた。〈第二時〉は、和歌のリズムや歴史的仮名遣いに注意しながら、「島津いろは歌」を音読し、読み慣れさせることを目指した。〈第三時〉は、

「島津いろは歌」四十七首すべてを扱うのではなく、中学生が理解できそうな五首に絞って学習者に提示することとした。第三時の目標は、「意見を交換しながら、「島津いろは歌」の中から好きな一首を選び、その根拠を書く。」である。

〈第一時〉	「島津いろは歌」の背景となる歴史的な状況、作者の当時の立場や置かれていた状況などを知る。
〈第二時〉	和歌のリズムや歴史的仮名遣いに注意しながら、「島津いろは歌」を音読し読み慣れる。
〈第三時〉	意見を交換しながら、「島津いろは歌」の中から好きな一首を選び、その根拠を書く。 ※後述

第一時は、「島津いろは歌」の背景となる歴史的な状況、作者の当時の立場や置かれていた状況などを知るために「島津いろは歌」全歌を提示し、作者である島津忠良公についての説明を行った。また、当時の時代背景や明治維新に与えた影響などについても考えさせた。

第二時は、和歌のリズムや歴史的仮名遣いに注意させながら、「島津いろは歌」を音読させた。小学校の段階から古典の指導が導入されたとはいえ、中学一年生が接する古典和歌の音読は読み慣れるのに時間を要することを実感した。もう一時間かけて音読練習をすべきであったことが課題として残った。

ここでの学習活動は大きく分けて四つある。一つ目は、五首の「島津いろは歌」から自分の好きな和歌一首を選び、その理由を書く活動である。二つ目は、グループでの話し合いによって一首を決め、なぜ、グループでその和歌を選んだのか、その理由を小黒板に書き、黒板に掲示し、全員で共有を図る活動である。さらに、それらの五首に共通する点はどのようなことを考えさせる活動である。五首から何がわかるか、作者の島津忠良公が何を伝えたかったのかを考えさせる、主題とも関わる活動である。これは地域教材「島津いろは歌」を活用することの意義の、「Ⅲ 当時のものの見方や考え方、生き方について思いを巡らし、自分なりの考えをもつことができる。」をふまえたものである。四つ目は自己評価である。授業を振り返り、AからCの中から○をつけさせ、感想も書かせる。そして、なぜ島津忠良公は「島津いろは歌」を散文にせずに韻文（和歌）にしたのだろうか、という問いである。難しい課題ではあるが、深まりのある話し合いを想定した。次は、本時の実際である。

〈本時の実際〉

- 1 これまでの学習を想起する。
- 2 本時の学習を確認する。

口語訳を参考にして、交流しながら、「いろは歌」から好きな一首を選び、その根拠を書く。
- 3 五つの和歌を音読し、内容を理解する。
- 4 グループに分かれ、課題について話し合う。
- 5 それぞれのグループで発表する。
- 6 歌の共通点について考える。

導入は前時の振り返りと本時の学習目標を確認させた。グループのメンバーと交流しながら自分の考えを述べることをねらいとした。そして、好きな（選んだ）理由を根拠をもって説明できるようにすることである。これは「PISA A型読解力」の三つのプロセス、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」を問うことをねらったものである。学習者が「島津いろは歌」を理解・評価しながら読む力を高め、郷土に関わる古典の価値を再発見できることを目指している。また、「島津いろは歌」に基づいて自分の思いや考えを書くことも目指している。自分の意見を述べたり書いたりする言語活動を設定した。

第一時、第二時を終えた実感として、すらすらと読めるようになるのに時間がかかり、「竹取物語」の学習を終えた中学一年生には「島津いろは歌」が難解であったということである。四十七首すべてを扱うのではなく、「私たち現代人がこれから生きていく上で考えたい和歌」として、五首に絞って考えさせた。五首は次のとおりである。

- ① はかなくも明日の命をたのむかな今日も今日もと学びをばせで
 - ② 似たるこそ友としよけれ交らばわれにます人おとなしき人
 - ③ 下手ぞとて我とゆるすな稽古だにつもらばちりもやまとことのは
 - ④ 流通すと貴人や君が物がたりはじめてきける顔もちぞよき
 - ⑤ よきあしき人の上にて身をみがけ友はかがみとなるものぞかし
- 五首に限定することによって学習者は話し合いの焦点化が可能になる。選択肢があることにより、話し合いの広がりや深まりが期待できる。

なお、【図2】のワークシートを用意した。

【図2】

「島津いろは歌」ワークシート

●「勉強って本当に役に立つのかな？」

①「はななくも」
②「頼りない」
③「あてにする」
④「頼りない」
⑤「頼りない」

① はかなくも明日の命をたのむかな今日も今日もと学びをばせで

【語句】
「はななくも」……「たのむ」……「をばせ」……「せで」……「しない」……
【訳】
「はななくも」……「明日の命をたのむ」……「今日も今日もと学びをばせで」……
①の歌を別の表現で言い換えるとしたらどうなるかな
「まじ」……「まじ」……「まじ」……「まじ」……
②の歌についてどんなことを考えたか書いてみよう

島津忠良公

●「本当の友達 っって…？」

①「はななくも」
②「頼りない」
③「あてにする」
④「頼りない」
⑤「頼りない」

② 似たるこそ友としよけれ交らばれにます人おとなしき人

【語句】
「似たるこそ友としよけれ」……「交らばれにます人おとなしき人」……
【訳】
「似たるこそ友としよけれ」……「交らばれにます人おとなしき人」……
②の歌を別の表現で言い換えるとしたらどうなるかな
「まじ」……「まじ」……「まじ」……「まじ」……
③の歌についてどんなことを考えたか書いてみよう

島津忠良公

◎にはまず和歌に関する事柄を挙げ、学習者に考えさせた。そして、和歌の語句について押さえさせる。さらに、授業者による口語訳をふまえ、わかりやすく言い換えるなどのようになるかを考えさせる。まとめとして、その和歌について、どのような感想を持ったかを考えさせる。これら一連の学習によって和歌の内容理解に迫るワークシートの工夫を行った。冒頭、中学校における古典の指導のあり方が変わったと述べたように、古語辞典を活用して調べることがは高等学校での古典の学習につながるという。

五 検証授業の考察

次は一年一組（三十二名）が個人で選んだ和歌を多い順に並べ、内訳を示したものである。

① 「はかなくも明日の命を…」	13名 (40%)
③ 「下手ぞとて我とゆるすな…」	12名 (38%)
⑤ 「よきあしき人の上にて…」	4名 (13%)
② 「似たるこそ友としよけれ…」	3名 (9%)
④ 「流通すと貴人や君が…」	0名 (0%)

まず、最も多かった①の、「はかなくも明日の命を…」の歌を選択した根拠としては、「自分がいつも明日にのぼして、全然努力をしないから、今の自分に合っている歌だと思ったから」、「今のこのときを大切にするとすごく感じたから」、「こういう経験が自分にもあるから、これがいいと思った」等、先延ばしや後回しといった言葉を用いて自分の経験にひきつけて書いていた。

③の「下手ぞとて我とゆるすな…」を選んだ根拠としては、「自分を下手だと卑下して努力を怠ってはいけないということ、継続は力なりという意味がいいと思ったから」や「下手だからこそ練習をたくさんすればいいんだなと思ったから」等、部活動での体験にひきつけて書いている学習者が目立った。

⑤の「よきあしき人の上にて…」を選んだ者は、「五首の中で自分にぴったりだったから。特に、友人をみて良いところはまねて、自分をみがくというのが心に残った」や「この歌はとても説得力があるからです。人のいいところは見習い、悪いところは反省するというのがとてもいいなあと思いました」等を記していた。

②の「似たるこそ友としよけれ…」については、部活動で取り組んでいるサッカーを例に挙げ、「上を目指すときに、二年の人や自分よりうまい人を選んで練習しているから」と述べていた。

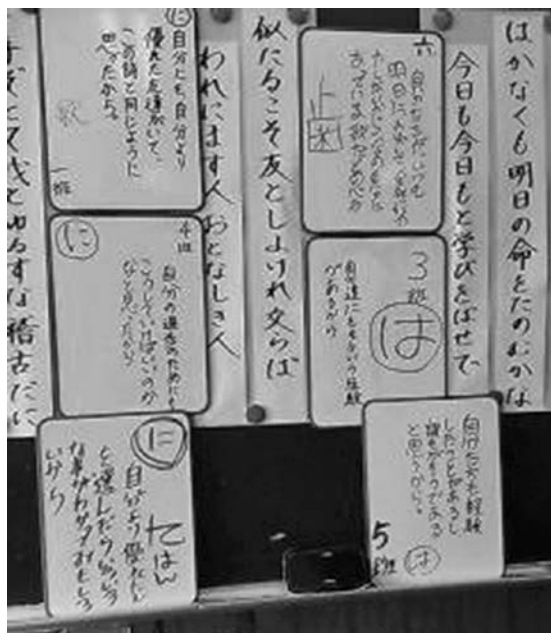
【写真1】は黒板に和歌と小黒板を掲示したものである。「個」の学習から四人編成の九グループを作らせた。個人の考えを述べ合い、好きな歌を一つに絞って選ぶ活動においても、一組の場合、①「はかなくも明日の命を…」を選んだグループが三グループあり、「自分たちも経験したことがあるし、誰もがそうであると思うから」と書いた小黒板を掲示した。

②「似たるこそ友としよけれ…」を選んだグループも①同様、三グループあった。「自分より優れた人を選んだら、いろいろなことがわかっておもしろいから」「自分の進歩のためにもこうしていけばいいのかなと思ったから」と小黒板を掲示した。

【写真1】

「はかなくも明日の命をたのむかな
今日も今日もと学びをばせて（和歌）」

「自分たちも経験したことがあるし、誰もがそうであると思うから」(小黒板)



⑤「よきあしき人の上にて…」を選んだのは二グループあり、③「下手ぞとて我とゆるすな…」を選んだのは一グループ、④を選んだグループは一つもなかった。④の歌を選んだのが二クラスともいなかったのは、生活経験が乏しいために、中学一年生には歌意がとらえにくかったためと考えられる。

なぜ、その和歌に学習者が共感できたのか、あるいは共感できなかったかを考察する。①の和歌を選んだ学習者が最も多かったのは、「人間の弱さを戒めたこと」に共感したからであり、怠け心が生じることを自分に重ね合わせてとらえたからである。①と②が全体の八割を占めているのは、四百年前に書き記した忠良公の思いが中学生にも理解できたからである。⑤については、学習者にとっては道徳色の濃い、耳の痛い表現に思えたのではないか。④を選んだ学習者が一人もいなかったのは、「先輩への礼儀」や「経験豊かな先輩の一言一句には千鈞の重みがある」ということの意味をとらえきれなかったことが考えられる。

終末の、「五つの歌に共通するところはどこなところだろうか」という問いに対しては次の表現が見られた。

- ・若者たちへのメッセージ
- ・誰もが経験のあることが書かれている。
- ・大人でも子どもでも心がけていきたいことが歌ってある。
- ・自分を進歩させるアドバイスが書いてある。
- ・自分を改める、もしくは自分を磨くための手段を書いている
- ・人を思いやること

これらをまとめると、「島津いろは歌」は、「若者へのメッセージ」で、「誰でも経験のあること」であり、「人を思いやること」でもあり、「自分を改め磨く」歌となる。いずれも「島津いろは歌」の本質をとらえた表現といえる。メッセージとしてあるべき人の心が和歌に込められていることに気づいた表現である。

左は授業の感想や意見を書かせたものである。

〈和歌について〉

- ・島津いろは歌が四十七首もあり、それぞれに意味があり、人生で生きるために必要なことが記されている。
- ・言葉は難しいけど、意味を考えたら、すごく深い言葉なんだなと思いました。いい歌もいっぱいあって楽しかったです。
- ・このいろは歌には、いろいろな教訓があるなと思った。五つの歌には学ばないといけないことがたくさんあった。

〈授業を振り返って、伝え合いについて〉

- ・五首の歌についてよくわかった。自分のグループだけでなくほかのグループの意見も聞けてよかった。

〈今と昔の比較、普遍性について〉

- ・昔の人も「今日は疲れたから明日にしよう」と思う気持ちがあったことがいろは歌でわかった。時間を大切にしないといけない。

〈古典について、島津忠良公について〉

- ・古典をもっと知りたい。島津家の歴史を調べたい。
- ・島津いろは歌は、とても大切なことがかいてあったから、島津忠良公はすごい人だなと思った。

授業の感想や意見をもとに、地域教材「島津いろは歌」を活用することの意義に照らして考察する。今と昔の比較、普遍性についてにあるように、「昔の人も『今日は疲れたから明日にしよう』と思う気持ちがあったことがいろは歌でわかった。時間を大切にしないといけない。」、また〈和歌について〉の、「島津いろは歌が四十七首もあり、それぞれに意味があり、人生で生きるために必要なこと

が記されている。」について、時間が有限であることは今も昔も変わらないことを理解し、先延ばしを諫める古人の教えに学習者は共感している。これは先に述べた、地域教材「鳥津いろは歌」を活用することの意義の、「Ⅱ 実物に触れ、実体験に基づいた学習は実生活とも結びつき、確かで豊かな学びの力となる。」及び、「Ⅲ 当時のものの見方や考え方、生き方について思いを巡らし、自分なりの考えをもつことができる。」の有効性を指し示すものである。

次に、〈古典について、鳥津忠良公について〉の、「古典をもっと知りたい。鳥津家の歴史を調べたい。」「鳥津いろは歌は、とても大切なことがかいてあったから、鳥津忠良公はすごい人だと思った。」には、地域教材「鳥津いろは歌」を活用することの意義の「Ⅳ 社会科など全ての教科において関連付けた学習が展開でき、多様な学習活動が期待できる。」及び、「Ⅴ 郷土の伝統や文化に対する関心や理解を深め、郷土愛を育むことができる。」を指し示すものであり、古典の学習に広がりや深まりをもたらす。発展学習として課題レポートを課すなどの学習も考えられる。

学習者は「鳥津いろは歌」に対して、〈和歌について〉〈伝え合いについて〉〈今と昔の比較、普遍性について〉〈古典について、鳥津忠良公について〉とさまざまな角度から興味や関心を示していた。

本学習において、まず歴史的仮名遣いを習得し、音読で読み慣れ、古典の世界に親しませた。「言葉は難しいけど、意味を考えたら、すごく深い言葉なんだなと思いました。いい歌もいっぱいあって楽しかったです。」という感想から、これらの和歌を教訓として自分の生き方の参考にしようとする姿勢がみられた。この点は、地域教

材「鳥津いろは歌」を活用することの意義の、「Ⅰ 学習者の興味・関心を喚起し、学習意欲を高めることができる。」及び、「Ⅲ 当時のものの見方や考え方、生き方について思いを巡らし、自分なりの考えをもつことができる。」を指し示すものである。意欲、関心の高さは、次の自己評価の集計結果にも表われている。

次は、学習者の自己評価（振り返り）を集計したものである。

①	好きな一首を選ぶことができたか。	A (97%)	B (3%)	C (0%)
②	好きな一首を選んだ理由を書くことができたか。	A (84%)	B (13%)	C (3%)
③	班員の考えや意見を聞いて自分の意見を伝えることができたか。	A (25%)	B (63%)	C (9%)
				D 無回答 (3%)

①の、「鳥津いろは歌」に関心をもつことについてはほぼ全員がAと答えることができた。また、②の、好きな一首を選び、その理由を書くことについても、Aと答えた者が八割を超えた。①と②はPISA型読解力「情報の取り出し」及び「テキストの解釈」等に関する質問項目である。また、③の、自分の考えを伝えることができたかということについては、Cは一割程度いたものの、AとBを合わせて九割いた。このように、学習者の感想や自己評価などから、地域教材「鳥津いろは歌」を活用することの意義の有効性を示すことができた。

終末の、「鳥津いろは歌」がすべて五・七・五・七・七の短歌の形式をとっているのはなぜだろうかという問いについては、一年生には

難解であったのか、二クラスとも意見が出なかった。「それは忠良

公が家臣団の指導と教育のため、家臣団としての規律を理解しやす
いように和歌によって覚えやすいようにしたのであって、年少の者
でも諳んじることができるようにしたのだ」と授業者からヒントを
出しながら引き出すことになり、もう少し時間を確保してじっくり
と考えさせたかったと課題が残った。また、「島津いろは歌」の理
解が深まるために、やや長めのまとまった文章を書かせるなど、ワー
クシートの工夫が必要であることを感じた。

今回の実証授業は中学一年生に対して行ったものである。この「島
津いろは歌」の実践を中学二年生や三年生を対象に行ってみてもよ
い。二年生や三年生にはそれぞれ発達段階に応じた言語活動例や指
導法が考えられる。指導法の工夫改善を今後の課題としたい。

六 結論

本論において、まず郷土や地域に着目した古典指導の先行研究か
ら検討を加え、成果と課題を抽出し、鹿児島県に関わる古典「島津
いろは歌」を活用することの意義を導き出した。五つの要件を再掲
する。

I 学習者の興味・関心を喚起し、学習意欲を高めることがで
きる。

II 実物に触れ、実体験に基づいた学習は実生活とも結びつき、
確かで豊かな学びの力となる。

III 当時のものの見方や考え方、生き方について思いを巡らし、

自分なりの考えをもつことができる。

IV 社会科など全ての教科において関連付けた学習が展開で
き、多様な学習活動が期待できる。

V 郷土の伝統や文化に対する関心や理解を深め、郷土愛を育
むことができる。

地域教材「島津いろは歌」を活用することの意義の有効性を確認
するために、「仮名遣いに注意し和歌のリズムに読み慣れ、作者の
思いを想像しながら古典和歌への関心をもつこと」を目標として、
検証授業に取り組んだ。本実践のねらいは、島津忠良公の遺訓が今
も昔も変わらぬ普遍的な価値を持ち、現代に生きる人々の指針とな
りうることを理解させることにある。学習者のワークシートの記述
や自己評価の集計結果からも、「島津いろは歌」を活用することの
意義の有効性を確認できた。郷土に関わる古典を見つけ、その価値
を再発見させることの有効性が示された。

「島津いろは歌」は、薩摩人として、あるべき人の心を和歌にし
た古典である。戦国の世に作られたとはいえ、生き方を教えるなど、
これらの教えに存在する普遍的な価値は現代社会にも学ぶところは
多い。今回の郷土や地域に着目した古典の学習をふまえ、さらに二
年次、三年次と系統性をもたせた古典の学習の実践を継続してい
きたい。

注

(1) 岩間正則「中学校で地域の文化・伝統を活かす教材開発を考
える」『月刊国語教育研究』日本国語教育学会 二〇〇九

(2) 米田猛・松田明大「中学校国語科古典指導における「地域教材」

の開発試論」富山大学人間発達科学部紀要第二巻第二号

二〇〇八

(3) 井上昌典「郷土にまつわる古典の教材化の試みⅠ・Ⅱ」『全国

大学国語教育学会発表要旨集』二〇〇七、二〇〇八

(4) 島津忠良(一四九二―一五六八)は島津氏の支族伊作領主の

伊作喜久の子である。三十五歳のとき、薩摩・大隅・日向三国を支配した。一五二七年に出家して日新斎と名乗り、永禄一

(一五六八)年に七十七歳で没する。義久・義弘はいずれも忠良

の孫で幼少から祖父忠良の薫陶を受けていた。「島津いろは歌」

が、後の薩摩藩郷中教育の基本となり、藩主の教育はもとより、

幕末維新の西郷隆盛や大久保利通、東郷平八郎らの生き方や考

え方にも影響を与えた。

(5) 武久康高「児童生徒が郷土文学教材を学習する意義とは何か」

『国語教育研究』広島大学国語教育学会 二〇一三

(6) 本実践は、平成二十三年度に前勤務校の出水市立出水中学校

の一年一組と二組を対象に行ったものである。

(7) PISA二〇〇九の調査から「読解力の三つの側面」が「情

報へのアクセス」「統合・解釈」「熟考・評価」に改まった。本

論においては、二〇〇六年までの「読解力の三つの側面」を使

用している。

参考・引用文献

井上昌典(二〇〇七)「郷土にまつわる古典の教材化の試み(Ⅰ)」

全国大学国語教育学会発表要旨集、一五九―一六〇頁

井上昌典(二〇〇八)「郷土にまつわる古典の教材化の試み(Ⅱ)」

全国大学国語教育学会発表要旨集、二四三―二四六頁

岩間正則(二〇〇九)「中学校で地域の文化・伝統を活かす教材開

発を考える」月刊国語教育研究 日本国語教育学会、一六―

二二頁

河野庸介編(二〇〇八)『中学校新学習指導要領の展開 国語科編』

明治図書

国語教育探求の会(二〇一四)『国語教育探求』第二七号

米田猛・松田明大(二〇〇八)「中学校国語科古典指導における「地

域教材」の開発試論」富山大学人間発達科学部紀要第二巻第二号、

一―一二頁

武久康高(二〇一三)「児童生徒が郷土文学教材を学習する意義と

は何か」国語教育研究 五四号、二三―三二頁

中渕正堯(二〇一)『教養総合カリキュラムのための基礎論文集成』

私家版

堀江祐爾(二〇〇七)『国語科授業再生のための五つのポイント』

明治図書

宮内征人(二〇一二)「北播磨の時代的・文化的背景と関連付ける

古典の指導」解釈 第五十八巻、六六六集、解釈学会、三五―

日本国語教育学会（二〇〇八）『月刊国語教育研究』第四三卷

四二九集

文部科学省（二〇〇八）『中学校学習指導要領』

文部科学省（二〇〇八）『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋

館出版社

文部科学省（二〇〇八）『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋

館出版社

なお、学習資料を作成する上で以下を参照した。

渡邊盛衛（一九一〇）『島津日新公』東京啓発舎

門田邦義（一九三八）『島津日新公いろは歌解説』金海堂書店

尚古集成館編（一九九二）『日新公いろは歌』尚古集成館

高城書房編集部（二〇〇〇）『島津日新公いろは歌』高城書房

熊倉江美『子どもたちに：いにしへのいろはことば』（二〇〇二）

ペンギン社

（みやうち ゆきと・鹿児島市立南中学校）